

R. Browning : *Abt Vogler* について

野 口 忠 男

1

Abt Vogler は、R. Browning が精神的情熱“spiritual fervour”を傾注して、音楽についての完全な精神“the most perfect soul of music”⁽¹⁾を歌った評価の高い優れた作品の一つである。C. W. Smith も述べているように、この詩は「論議的、叙情的、劇的、宗教的、神秘的、形而上的であり、しかも同時代的な色彩が強く流れている」⁽²⁾のである。Browning の思想感情のほとんどすべてが盛り込まれていると言っても決して過言ではない。この豊かな想像的詩世界の中で、Vogler の創造的体験“creative experience”がいかに展開されているか考えて見る時、一つの問題に直面するのである。C. W. Smith も示唆している⁽³⁾ように、Vogler は、天地融合の妙技入神の境地に到っても覚醒された、“individual integrity”を保ち続け、忘我の恍惚的な境地に浸り切っていないのである。*By the Fireside*⁽⁴⁾に於いても同様に認められた Browning のこの認識の態度を、私達はいかに理解したらよいのであろうか。さらにひき続いて Vogler が絶対的な実在である神の本質を直観した後に生起して来る芸術と人生哲学の問題をも合わせて考えてみたい。

2

本論に入る前に、本詩が収載された *Dramatis Personae* の背景を一瞥し、Abt Vogler の略伝に触れ、Browning が何故 Abt Vogler を詩の主題として選んだのか考えておく必要がある。

1855年 R. Browning は、E. B. Browning との情熱的な恋愛と幸福な結婚生活から得た広い視野と深い思想“the depth of thought”に立脚し、

Men and Women を書いた。この中には、恋愛詩、芸術詩、宗教詩の傑作があり、心理の解剖を劇的独白の形式で描写し、全篇に樂觀的な調べが流れている。1861年に愛妻が亡くなった後、Browning は深い悲哀と絶望の淵に身を沈めながらも、生来の男性的な気質によって立ち直ることが出来た。*Men and Women* 以来 8 年半程の空白を置いて、1864年に *Dramatis Personae* が出版された。この詩集には、人生の裏面“*The seamy side of life*”⁽⁵⁾ が描かれ、絶望的な響きが聞えるのである。しかしながら、Browning は闘う詩人として、1860年代の揺れ動く時代の中で、自信を持って恐れることなく精力的に詩作活動をしていたのである。このことについて、W. C. De Vane は次のごとく述べている。

The true topics of *Dramatis Personae* are such live and pressing problems as science, higher criticism of the Scriptures, recent tendencies in the religious life of England, spiritualism, social conditions in the 1860's, and modern love. ⁽⁶⁾

また、この詩集では実在の人物を取り上げて描いていることも見逃すことの出来ない点である。Browning は実在の人物を仮面として登場させ、自分の芸術観、哲学・宗教観を余すところなく述べているのである。

Abt Vogler (1749-1814) の詳細な生涯については、E. J. Burt⁽⁷⁾ の記述があるので、私達は、本詩の理解の一助と思われる範囲で考えておきたい。彼は西ドイツの Würzburg のカトリック教徒の家庭に生れ、幼少年時代から音楽と宗教教育を受ける。ローマへ遊学し、帰国して音楽院を設立し、指揮者となる。世界放浪の旅に立ち、異国の音楽を学ぶ。自分で製作した楽器 *orchestration* で、即興演奏を行い、一躍有名となる。Browning の音楽教師 John Rolfe の師であり、著名な音楽家 Weber, Meyerbeer, Gänsbacher の生みの親である。Vogler の性格については、宗教的瞑想的と言うよりはむしろ独創的で活動的であった。Browning は、Vogler を実際の彼よりも精神的で哲学的宗教的な人物として描いていると言える。⁽⁸⁾

次に、なぜ Browning は、Vogler を詩の主題として選んだのかを考え

てみたい。Browning は、最も深い真と美の純粋な芸術を表現するのに適切な題材を模索していたと想像することが出来る。この要件を満たしてくれる人物は、卓越した即興演奏家で、篤い信心を持ち、しかも無名の芸術家であることが必要であった。即座に Vogler の名が、詩人の脳裏に浮んだものと思われる。Browning は幼き日に、彼の音楽教師であった John Rolfe から、Vogler の人と音楽について聞かされていたにちがいないからである。⁽⁹⁾

3

E. J. Burt は、*The Seen & Unseen in Browning*⁽¹⁰⁾の中で、*Abt Vogler* の構成を大きく三つに分類している。

- | | |
|---|--------------|
| (1) The Building of the Palace of Music | Stanzas 1- 5 |
| (2) The Song of Exultation | Stanzas 6- 7 |
| (3) The Return to Earth | Stanzas 8-12 |

この分類は、本詩を理解する上で誠に当を得たものである。本詩の下降——上昇——瞬時にして永遠の實在の直観——回帰の詩形態は、C. M. Bowra の説くロマン主義的想像力⁽¹¹⁾の基本的な形であり、S. T. Coleridge の *The Rime of the Ancient Mariner*, J. Keats の *Ode to a Nightingale*, さらには、F. Nietzsche の *Zarathustra* の精神の遍歴の軌跡に見られるものである。Burt の分類を踏まえながら、各連の要旨の流れを捕えておきたい。

第 I 連……Vogler は、Solomon 王の不巧の宮殿に匹敵する音楽の殿堂を建立することを願う。

第 II 連……Solomon 王の堅固な宮殿の如く、音楽の殿堂の基礎を地獄の源泉に据える。

第 III 連……水晶のように透明な殿堂が、地上高く形成されて行く様子を、ローマの寺院になぞらえて描いている。

- 第IV連……Voglerの情熱に駆られて、自然も天も、新しきものを生み出そうと懐妊する。殿堂の尖塔には、遊星が光輝を放ち、天と地が一つとなる妙技入神の境地が出現する。
- 第V連……光輝の世界に三つの異なる存在が現われる。創造の永久的瞬間に、過去、現在、未来のものが皆同一に存在する状態が顕現する。
- 第VI連……音楽と魂とにより音楽の殿堂を完成させることが出来た。これを絵や詩に表現しても、法則に従う芸術であるため、美と真の究極の相を補えることは出来ない。
- 第VII連……音楽は、すべての法則の背後にある全能者の意志の閃きと直接係わるものである。それ故に、音楽は三つの音から一つの星を創造することが出来る。
- 第VIII連……音楽の殿堂が消える。Voglerは感きわまり涙にむせぶ。聴衆は彼に慰めの言葉を掛けるが、神を信じる限り救われ、かつて実在していたものは、永遠に存続するという確信を述べる。
- 第IX連……永遠の実在である神を全面的に頼む気持を、疑問形を用いて表現している。善は、決して消えることなく、虚であり、無である悪のために、よりよき善となる。
- 第X連……人間が願ひ望む全部の善は存在する。瞬時にして永遠の実在が証される時、美や力も存続する。天にも届く情熱は、神に捧げられた音楽であり、神が一度それを聞けば十分である。
- 第XI連……現世の失敗は、恐れることはない。小人には、好き勝手に

理屈をこねらせておけばよい。神はごく少数の音楽家のみ真理をささやくのであるから。

第四連……Vogler は、地に着いた気持になる。彼は、基本の和音を探り、異なる基調に立ち、ついに現実のハ調に戻る。

4

第 I 連から第 V 連までは、壮嚴な音楽の殿堂が建立される経過と Vogler の魂が浄化して行く過程であり、私達の関心の中心をなす箇所であるため詳細に考えて行きたい。

第一連。Vogler は、自分で製作した楽器 *orchestrion* の前にたたずみ、ホメロスやミルトンが物語を歌うに際し、女神ムーサに呼びかけたように、敬虔な気持で靈感の訪れを待っている。この時の Vogler の姿を、E. J. Burt は生き生きと想像的に描写している。

An elderly man seated at an organ of an old-fashioned form, is the only object in the picture we have given. It is true, that in imagination we can fill up a few details. We can see a large and venerable head with an aureole of grey white hair falling on to the sloping shoulders. We can see a slightly rounded and finely featured face, with an expression at once grave and genial. Eyes intense and far seeing—eyes, in fact, which are seeing what the mind's ears are hearing—what the heart is feeling and translating into mental imagery, both fantastic and exquisite and which the full and supple hands are transmitting into the outer world.⁽¹²⁾

Vogler は、壮麗な音楽の殿堂“the structure brave, the manifold music” (l. 1) を、Solomon 王の不巧の宮殿にたとえている。*Saul* では David, *One Word More* では Moses, *A Death in the Desert* では John を借りて、Browning の感情や思想を表現しているように、ここでも Solomon

王の神に通じる力を借りて、音楽の殿堂を建ててることを暗示しているのである。Solomon 王が、一度神聖な神の御名“the ineffable Name”(l. 7) を唱え、天高く舞う天使、地下に潜む悪魔、人間、獣、蛇、虫“Armies of angels that soar, legions of demons that lurk, / Man, brute, reptile, fly”(ll. 4-5) たちがそれぞれ力を合わせて、Solomon 王の愛する女王のために、たちまち宮殿を建立してしまうのである。

ここで Browning は、Dante の天国界・煉獄界・地獄界を想起させるような三界——天国に住む天使、大地に住む人間、獣、蛇、むし、地下に住む悪魔——を描いている。この世に住む人間は、天国と地獄、天使と悪魔、善と悪、聖と俗、明と暗の中間で両棲動物のように生きて行く存在である。しかし、Vogler の願いは、これら諸々の創造物の働きによって三界を統一する壮大な音楽の殿堂を築き、尖塔の高みまで到達することなのである。そのために、第二連に於いては、音楽の殿堂の基礎をなす地獄の源泉がいかなる心象で描写されているか考えてみたい。

第二連。Vogler の奏する楽鍵は、一つ一つ助け合い、離れては結びつき、美しく不巧な音楽の殿堂を建立するために精一杯努力している。ある楽鍵は地獄の底へ突入して行き、岩板に幅広い土台を据えて、堅固な基礎が出来る。この地獄の世界で大切な心象は、地獄の源泉で赤々と燃えている火陥である。

And one would bury his brow with a blind plunge
 down to hell,
 Burrow awhile and build, broad on the roots of things,
 Then up again swim into sight, having based me my palace
 well,
 Founded it, fearless of flame, flat on the nether
 springs. (ll. 13-16)

地獄“hell”の源泉“the nether springs”に燃える火陥“flame”とは、一体いかなることを意味しているのであろうか。これに言及する前に、地獄の心象の特徴について、聖書、ホメロース、Dante、Milton を簡単に見て

おきたい。

聖書に見られる地獄の世界の描写には、次のものが見られる。

“where (= in hell) the devouring worm never dies and
the fire is not quenched.”

(Mark 9: 48)

“the penalty in eternal fire”

(Jude 7)

“the lake of fire with its sulphurous flames”

(Revelation 19: 20)

これらの例からも理解されるように、火の燃える刑罰の世界である。ホメーロスの「オデュッセイア」の招魂の場面で描かれている地獄は、死者の魂が群がる陰惨とした暗黒の世界である。Danteの「神曲」の地獄界は、円形劇場のような仕組になっていて、生前の善行悪行に応じて肉体的精神的責苦を受ける悲惨なところである。Miltonの*Paradise Lost*に於ける地獄の描写は次のようになっている。

A Dungeon horrible, on all sides round
As one great Furnace flam'd, yet from those flames
No light, but rather darkness visible
Serv'd only to discover sights of woe,
Regions of sorrow, doleful shades, where peace
And rest can never dwell, hope never comes
That comes to all,⁽¹³⁾...

これら以上の地獄の描写に現われている主要な考えは、暗黒の世界で、そこには火窟が燃えていて、恐ろしい責め苦が行なわれる場である。しかし Browning の描く“hell”の心象は、“flame”と“the nether springs”は

表現されているが、“fearless”(l. 16)からも感知されるように、罪に対する恐ろしい責め苦の世界ではなく、靈魂が罰の重さを認識し、自ら神の意に沿って靈魂の修業を実践するところなのである。それでは、地獄の“the nether springs”とは、Browningにとっていかなる意味をなすものであろうか。E. J. Burt は、これを説明するのにアラビアの神学に触れ、つまるところ“Chaos”⁽¹⁴⁾であると述べている。

私達は、地獄の底に、“the nether springs”で象徴される混沌とした水の要素と“flame”で象徴される火の要素を認めることが出来る。この地獄の世界の火と水の要素は、宇宙的に眺めた場合には、根源的で神的な生命の流動し燃えているケイオス的なものの表象であり、人間的に眺めた場合には、心の奥底の無意識の世界で混沌と漂っている生命の源泉と考えることが出来る。Nietzsche が *Thus Spoke Zarathustra* で、太陽と海の心象を象徴的に用いて表現したのもこれと関連するものと言える。Browning の魂が、真なるもの美なるもの善なるものを求める激しい情熱にかられると、無意識の世界に流動する火と水が活性化され流れ出て来るのである。ケイオス的な地獄の世界の底へ、音楽の殿堂の基礎を据えた楽鍵は、高みへ向って限りなく上昇することになる。

第III連。Vogler は、楽鍵の動きを優れた忠臣と競い合う波頭にたとえて表現している。この箇所は、P. B. Shelley の *To a Skylark* を思い出させる。

Higher still and higher

From the earth thou springest

Like a cloud of fire ;

The blue deep thou wingest,

And singing still dost soar, and soaring ever singest.⁽¹⁵⁾

空中高く組み建てられて行く音楽の殿堂は、S. T. Coleridge の *Kubla Khan* の“A sunny pleasure-dome with caves of ice !”⁽¹⁶⁾を思い出すことが出来る。Vogler の音楽の殿堂は、金色の胸壁を廻した水晶のように透明なものの“my rampired walls of gold as transparent as glass”(l. 19)である。これは、純粹で神々しい壮麗な殿堂の心象であり、同時に Vogler

の魂も純化されていることを暗示していると言える。彼はさらに高く、ゴシック様式を思わせる殿堂を築いて行き、これを祭の晩にみごとに灯るローマの大寺院にたとえている。

私達は、地獄の源泉の“flame”に続いて、ここでも“fire”(l. 21)と“a great illumination”(l. 22)の火の心象を考えてみたい。祭の晩に走者の持つ“fire”は、地獄の源泉で赤々と燃えていた“flame”のイメージを彷彿させるものであり、この“fire”が、尖塔に達する時に、高き栄光“the pinnacled glory”(l. 24)が、Voglerの眼前に現出する仕組になっている。つまり、地獄の“flame”が“fire”となり、これが“the pinnacled glory”につながり、Voglerの妙技入神の境地が生れ出るのである。すでに問題提起しておいた次の箇所は、入念に分析する必要があるので、詩を引用して考えてみたい。

5

In sight? Not half! for it seemed, it was certain, to match man's
birth,
Nature in turn conceived, obeying an impulse as I;
And the emulous heaven yearned down, made effort to reach the
earth,
As the earth had done her best, in my passion, to scale the sky:
Novel splendors burst forth, grew familiar and dwelt with mine,
Not a point nor peak but found and fixed its wandering star;
Meteor-moons, balls of blaze: and they did not pale nor pine,
For earth had attained to heaven, there was no more near
nor far. (ll. 25-32)

第I～IV連まで、Browningは主に写実的手法を用いて音楽の殿堂を描写してきたのである。しかし第V連に到って、詩人は、写実的な描写によらずに象徴的手法を駆使して、神秘的で根源的な実在の世界を描き出そうとしている。Voglerの到達した実在の世界の特質を考えるに当って、実在界を認識する主体であるVoglerの魂と客体である万象の世界

について考察して行くことにする。今まで述べて来たことから理解されるように、Vogler の魂は、高き極みに達し、誇れる魂“the pride of my soul”(l. 24) となり、純粹にして完全なもの“I was made perfect”(l. 40) なのである。Wordsworth の *Tintern Abbey* の“a living soul”と酷似した魂の状態になっているのである。

Until, the breath of this corporeal frame
And even the motion of our human blood
Almost suspended, we are laid asleep
In body, and become a living soul :
While with an eye made quiet by the power
Of harmony, and the deep power of joy,
We see into the life of things.⁽¹⁷⁾

Vogler の純粹で完全な魂に対する心象はいかなる様相を呈しているの
であろうか。私達は、“the emulous heaven yearned down”(l. 27) や
“Novel splendors burst forth”(l. 29) の表現から、流出の思想を感知す
ることが出来る。そこで、Browning が流出の考えをいかに捕えていたの
かを見てみたい。*Paracelsus* において、すべての存在が、永遠なる神性の
源から流出すると歌うのである。

I know, I felt,
.....
— what God is, what we are,
What life is — how God tastes an infinite joy,
In infinite ways — one everlasting bliss,
From whom all being emanates, all power
Proceeds ;

(part V ll. 638-46)

Christmas-Eve & Easter-Day に於いては、神の靈性が天から地へと流
れ出ている。

His All in All appears serene
With the thinnest human veil between,
Letting the mystic lamps, the seven,
The many motions of his spirit,
Pass, as they list, to earth from heaven.

(Il. 1306-10)

Saul においても森羅万象すべてが神から流出するものと説く。

From thy will, streams the worlds, life and nature, thy dread
Sabaoth ;(XVIII l. 29)

The Ring and the Book においては、心も天上から現れたものと語る。

Mind is not matter nor from matter, but
Above,—— (Book X ll. 1358-9)

以上の例からして、Browningが、森羅万象すべてのものが、根源なる一者である神から流出している思想を強く抱いていたことが理解されるのである。GriffinとMinchinは、*The Life of Robert Browning* の中で、BrowningのShelleyの詩観に触れ、次の言葉を引用している。

…, this highest kind of poetry, he argues, can only issue from a pure source, being an effluence rather than a production; and we cannot love it without loving the source from whence it came.⁽¹⁸⁾

Voglerは、純粹で完全な魂となり、万象は唯一なる源泉から流出していることがわかったのである。完全な魂で万象を直観する時、いかなる想像的な詩の世界が出現して来るのであろうか。Voglerの激しい衝動“an impulse”(l. 26), “my passion”(l. 23) にかかられて、“Nature”(l. 26)

も新しいものを生み出そうと懐妊し、競争心の強い天“the emulous heaven”(l. 27) も下界“the earth”(l. 27) にあこがれ、地に達しようと努めるのが見られる。“Novel splendors”(l. 29) が流出しさらに各々の尖塔には、“wandering star”(l. 30) が輝いている。この流星は、“Meteor-moons, balls of blaze”の巨大な流れ星の心象で描写されているのである。

ここで一つの疑問が生じて来る。*By the Fireside* の“one and infinite”の際にも、詩人の純粋な魂は静止し、万象の流動する様相が表現されていたのである。C. W. Smith も暗示しているように、Browning の場合、純粋な魂は、J. Keats のように対象の中に自我を滅却して、忘我の境地に入るのではなく、融和統一の場合にも覚醒されたままで、森羅万象の流動する実相を直観しているのである。なぜこのように、覚醒された純粋な魂で、宇宙自然を直観するのであろうか。私達は、新プラトン学派の中心をなすプロチノス⁽¹⁹⁾の流出説と魂の発展“the development of a soul”について考えることによって、Browning の最も純粋な魂に於ける直観の特性を捕えることが出来るのではないかと思われる。

Browning が Shelley を耽読し、Plato を読んでいたことは、自叙的な処女作品 *Pauline*⁽²⁰⁾ に歌われている。流出の思想は、Shelley にも認められ、Wordsworth や Blake にも表現されているのである。流出の思想は、歴史的にはおよそ次のような流れをなしている。始原的な神アイオーンと呼ばれる神々が流出すると考えるメソポタミアやエジプトの神観、インドの古代哲学。これが古代ギリシャに流れ入り、プラトンやアリストテレスに入り、プロチノスらの新プラトン主義の主要な体系をなし、9世紀のスコトゥスやエリウゲナを経て中世のスコラ学に取り入れられる。ベーメやスウェーデンボルグに受け継がれるのである。

プロチノスの流出説は、根源的で善なる一者から精神が流出し、精神から靈魂、靈魂から質料が順に流出してくると説く。流出した靈魂が、根源的で善なる一者を求めて戻って行くことが、魂の発展である。この時たどる靈の変転の過程は、浄め→観想→忘我となるのである。Browning は、Wordsworth 同様、この忘我の境地に踏み込み、魂の善悦に浸ることはしない。とするといかなる魂の発展の軌跡を描いているのであろうか。ここでキリスト教の浄化 (purificatio) →照明 (illuminatio) →完

徳 (perfectio) ⁽²¹⁾の思想を考え合わせてみる必要がある。Browning は、魂の浄め (浄化) を行ない、観想と照明を同時に体験するが、忘我の境地に入るのでもなく、完徳に向うのでもない。Wordsworth の“wise passiveness”と Keats の“negative capability”を、同時に行なっているとも言える。Browning は、観想の中で照明され、照明の中で観想すると言うことが出来る。これは、Shelley の“intellectual beauty”の立場でもあったのである。

Browning は、根源の神からの流出に対して、ネオ・プラトニズム的な浄め→観想→忘我とキリスト教的な浄化→照明→完徳を精神の最も純粹で完全な時点に於いて、同時的に体験し、浄め (浄化) → (観想⇒照明) →詩人としての生の方向へと向って行くのであると言える。観想と照明が、同時に交互に動いている時は、直観と靈感が純粹な魂の中を流れ、次の連で見ると、時空を超越した高次な詩的想像の世界が出現するのである。これまで述べて来たことは、つまるところ、次の言葉によって巧みに表現されている。

“His (= Shelley) noblest characteristic,” he (= Browning) says, “I call his simultaneous perception of Power and Love in the absolute, and of beauty and good in the concrete, while he throws, from his poet station between both, swifter, subtler and more numerous films for the connection of each with each than have been thrown by any modern artificer of whom I have knowledge....”⁽²²⁾

“Power and Love in the absolute”と“beauty and good in the concrete”とは、Browning の詩精神の核心でもあると言える。“Novel splendors” (l. 29) や“wandering star” (l. 30), “Meteor-moons, balls of blaze” (l. 31) は、Vogler の透徹した魂に映ずる“Power and Love in the absolute”つまり絶対的實在の心象の象徴的描写なのである。地獄の源泉に燃えていた“flame”が“fire”となり、神界で“Novel splendors”となる時、天と地が一つに融合し、永劫の世界が現われて来る。これは、“earth had attained to heaven, there was no more near nor far” (l. 32) と表現されてい

る。次に第V連を取り上げ、Voglerの天地融合の世界の特質について、光と魂の不滅性の問題を論じて行きたい。

Nay more ; for there wanted not who walked in the glare and
glow,
Presences plain in the place ; or, fresh from the Protoplast,
Furnished for ages to come, when a kindlier wind should blow,
Lured now to begin and live, in a house to their liking at last ;
Or else the wonderful Dead who have passed through the body
and gone,
But were back once more to breathe in an old world worth
their new :
What never had been, was now ; what was, as it shall be anon ;
And what is,—shall I say, matched both? for I
was made perfect too. (ll. 33-40)

音楽によせて Vogler が垣間見た天地融合の世界は、燦然と光り輝く太陽の心象と思われる“glare”(l. 33) や“glow”(l. 33) で表現されているように、光輝の世界である。私達は、“light”⁽²³⁾の心象である“purity”や“wisdom”や“cosmic energy, creative force”を、この世界に読み込むことが可能であると思われる。なぜなら、この光輝の世界は、神の指“the finger of God”(l. 49) つまり神の意志の閃き“a flash of the will”(l. 49)の充滿している“celestial light”の世界である。Plato流に言えば善のイデアに相当する真理の光“the light of truth”の世界であると言える。

Voglerは、この光輝の世界の中に、魂の三つの存在の相を捕えるのである。一つは、明らかに見える現存者、つまり現世に生を受けている者の魂の姿である。二つは、原型から流れ出て来て、未来に出現する形をなしているもの、三つは、すでにこの世を去った偉大な故人の魂の姿である。現在世、未来世、過去世のそれぞれの魂が、時空を超越した光輝の世界に会しているのである。これら三つの魂は、時間的關係からして、いかなるものであろうか。すでに引用した箇所“What never had been, was now ; what was, as it shall be anon ;/And what is—shall I say,

matched both?”を考えてみたい。

“What never had been”とは、文字通り形なく無なるものであるけれども、否定的にしか表現することの出来ないものであり、万物を生み出す源泉の力と愛の満ち溢れている世界を暗示しているものと推測される。それが徐々に形を成して来て、原型“the Protoplast”(l. 34)ともなり、ある存在“what was”となる。これは、過去の存在と未来の存在の中間に位置する現存在“what is”を経過して、未来にまた現れる“it shall be anon”のである。霊魂の不滅を説いた Wordsworth の次の句が思い起こされる。

Our brith is but a sleep and a forgetting :

.....

But trailing clouds of glory do we come

From God, who is our home :⁽²⁴⁾

神の愛と力の創造的な形なき世界から、過去の者の魂→現在の者の魂→未来の者の魂が、不滅の形で発展して行くことが理解される。ここには、魂は永遠に生き発展して行くと言う、Browning の霊魂不滅の思想がありありと流れているのである。

6

第VI・VIIに於いては、Vogler の芸術観特に絵画と詩に対する音楽観が述べられているのでこれを考えてみたい。

Vogler は、心のうちで“the apotheosis of Music”を唱え、音楽の殿堂の完成に際し、次の三つの要件を上げている。一つは、Vogler の魂の願い通りに妙音を奏でた楽鍵、つまり音楽に於ける創造の働きである。二つは、神を誉め称えた Vogler の魂、つまり絶対的な実在である神を直観する魂の想像的な働きである。三つは、音楽と Vogler 自身であるが、音楽を創造の働きの楽鍵と考え、Vogler 自身を、想像的な働きの魂と考えることが出来る。しかし、これらの要件によって、壮麗な音楽の殿堂が成就したのではなく、“the finger of God, a flash of the will”(l. 49) で

象徴される靈感が、Vogler の魂に流れ入ることによって完成したのである。この神の意志は、すべてのものの法則“all laws”(l. 50) の背後に存在しているものである。音楽は、直観によって得られた神の意志の閃きである“the origin of beauty and truth”を、直接に創造することが出来るのである。ところが、絵画や詩は、形式や物語という法則に従う芸術“art in obedience to laws”(l. 47) であるため、根源的な実在の法則を生き生きと直接的生命的に表現することが出来ない。すべての芸術は音楽の状態に慣がれると言ったショーペンハウアーの言葉が思い出される。音楽の自由で直接訴えられる伝達手段のために、Vogler は、三つの音から第四の音を創造するのではなく、一つの星を創ると述べている。

…out of three sounds he frame, not a fourth sound,
 but a star.
 Consider it well : each tone of our scale in itself is naught ;
 It is everywhere in the world—loud, soft, and all is said :
 Give it to me to use! I mix it with two in my thought :
 And, there! Ye have heard and seen : consider and bow
 the head! (ll. 52-6)

三つの音とは、Vogler の心の中の二つの音と神の指で、三音が和して一つの星が創造されるのである。この星の心象について、E. J. Burt は、東洋的思惟⁽²⁵⁾に言及しているが、私達は、C. W. Smith の見解を見てみたい。彼は、この“the image of the star”について“the musician’s resolution to inform his conception of structure with light and life”と“the realization of his achievement of perfect, consummate form”⁽²⁶⁾をあげ、さらに次のように要約しているのである。

The star-images of *Abt Vogler* may be regarded, therefore, as “points” in an argumentative scheme, as supporting tones or “crucial moments” in a lyric design, or as the marks of the poet’s emphatic approval of the ideas and the personality that he wishes to present.⁽²⁷⁾

C. W. Smith の見解に加えて、星の象徴⁽²⁸⁾は、“the spirit”であり、さらに“the forces of the spirit struggling against the forces of darkness”である。つまり神界の秘密を人間に伝達する神妙なものでもあると思われる。Vogler は、三つの音から星を創造する音楽家の偉大な力を敬服するように、聴き手に向って自信に満ちた発言を行なうことが出来る。

7

第Ⅷ連から最終連にかけては、“the return of the Soul to Earth”である。ここで私達が取り扱う問題は、(1) 音楽の殿堂は消え失せても、一度永遠の實在なる神を直観したなら、神の本質は永久に続くとする信念、(2) 善悪観、(3) 現世に於ける失敗の成功の哲学、つまり人生は魂の試練の場であるとする考え、(4) 中庸の徳の倫理的な側面である四点を取り上げて述べて行きたい。第Ⅷ連。音楽の殿堂は、Vogler の眼前より消えてしまったのにもかかわらず、彼は深く感動し、歓喜の涙があふれ、神を賛美する気持が湧き起って来る。浅薄な俗人“the shallow worldling”である聴き手は、なぐさめの言葉を彼にかけるのである。しかし、地獄の底から高く築き上げた殿堂の尖塔で直観した絶対的な實在である神の本質は、決して消え去るものではなく、永久に存続するものであるとする Vogler の絶対的な信念を披れきしている。

To me, who must be saved because I cling with my mind
To the same, same self, same love, same God: ay,
what was, shall be. (ll. 63-4)

自己と愛と神が一つとなる時、魂の救済が得られ、直観したものは、永久に続くのである。この一瞬にして永遠の實在を直観する問題は、第Ⅸ連に於いても述べられている。

第Ⅸ連。Vogler は、疑問形を三回駆使しつつ、彼の神に対する絶対的な確信を描き出している。彼は、神の本質として、永遠に変ることなき創造者“Builder and maker”(l. 66) としての力と人間の心を愛で満たす

“thy power can fill the heart”(l. 68) 限りなき神の愛を誉め称えている。E. J. Burt も述べているように、善“good”は神の偉大なる権能である⁽²⁹⁾ため、神から顕現する善は、決して消失するものではなく、不滅なるものである。

There shall never be one lost good! What was, shall live as
before; (l. 69)

善に対する悪“evil”(l. 70)は、“null”で“naught”で“silence”であると述べられている。善は、実在なる神の権能であるのに反し、悪の本質は、究極的には、空虚で虚無なるものである。

The evil is null, is naught, is silence implying
sound; ⁽³⁰⁾(l. 70)

Browningは、善と悪との関係をいかに考えていたのであろうか。Blake が、“Without contraries is no progress”と述べているように、Browning にも善と悪の対立関係がみられる。例えば *With Francis Furini* に於いて

—Type needs antitype :
As night needs day, as shine needs shade, so good
Needs evil : how were pity understood
Unless by pain? (ll. 483-6)

The Ring and the Book では、次のように表現されている。

What's love, what's faith without a worst to dread?
Lack-lustre Jewelry! (ll. 2382-3)

本詩に於いては、

What was good shall be good, with, for evil, so much
good more; (l. 71)

と述べられ、これから理解されるように、Browningは、善は不滅なるものであるが、悪の存在があつて初めて、本来の善が明示されると考えている。つまり、両棲的人間は、悪の手先となるのではなく、悪の本質的な意義を悟り、善と悪の対立抗争を経て、悪を超克し、絶対的な実在である神を希求することが必要なのである。ここに Browning の現世の不完全、敗北、失敗、挫折は、永遠の生命に達するための道程であるとする哲学が生まれて来るのである。

No, when the fight begins within himself,
A man's worth something. God stoops o'er his head,
Satan looks up between his feet—both tug—
He's left, himself, i' the middle: the soul wakes and grows.
Prolong that battle through his life!

本詩に於いても力強く表現されている。

On the earth the broken arcs; in the heaven, a perfect
round. (l. 72)

第X連。私達は、第VIII連に於いてすでに見て来たように、一瞬のうちに永遠の実在が垣間見られる時、美と善と力“beauty”“good”“power”(l. 74)は、影ではなく、それ自体として存続しつづけるのである。

All we have willed or hoped or dreamed of good shall exist;
Not its semblance, but itself; no beauty, nor good, nor power
Whose voice has gone forth, but each survives for the melodist
When eternity affirms the conception of an hour.

(ll. 73-7)

Pippa Passes, Saul, By the Fireside に於いて見られるように、恋人“the lover”(l. 79) や詩人“the bard”の、地上ではあまりに高尚すぎ、雄大すぎる情熱“the passion”(l. 78) は、神に捧げられた音楽である。神が一度この音楽を聞けば、恋人や詩人は神と深くつながれるため、十分なのである。

第Ⅺ連。Vogler は、疑問形を三度用いて、現世の苦難について述べ、現世は魂の試練の場という思想を再現している。人生について、不平不満を言う小人には、好き勝手なことを言わせておけばよい。神は、神の計画として、われわれのなかのごく僅かな者だけ取り上げてくれると述べている。Blake が、*All Religions are One* の中で語っているように、音楽家は、神のささやきを聴き得ることが出来るのである。

第Ⅻ連。Vogler は、地に着いた気持になる。あたりには、静けさが満ち溢れている。彼は、楽鍵を与えよと呼びかけ、短音になるまで、半音ずつさげびながら、基本の和音を探るのである。ついに、彼はハ調に安息の地を見出したのである。ハ調の意味は、魂の慰安であり、救いであり、平安であると言える。

…I have dared and done, for my resting-place is found,
The C Major of this life: so, now I will try to sleep.

(ll. 95-6)

Pippa Passes の終幕に於いて、Pippa は歓喜の一日を終え、神の愛に満たされた眠りに就くのである。音楽家 Vogler も、即興演奏によって壮麗な音楽の殿堂を築き終え、今満たされた心境で眠りに就くのである。Vogler の姿には、不安や焦燥のかげりもなく、平静な中庸の精神を思い描くことが出来る。

〔注〕

- (1) G. K. Chesterton, *Robert Browning*, (St Martin's Press, 1967), p. 23.
- (2) C. W. Smith, *Browning's Star-Imagery*, (Octagon Books, 1976), p. 182.
- (3) *Ibid.*, p. 183. “…the sign of a personality that retains its individual

- integrity in spite of its moments of genuine humility."
- (4) 「北星論集」(16号)(1978年)拙文「Robert Browningの“By the Fireside”について」参照。
 - (5) W. C. DeVane, *A Browning Handbook*, (Appleton-Century-Crofts. Inc., 1955), p. 282.
 - (6) *Ibid.*, p. 282.
 - (7) E. J. Burt, *The Seen & Unseen in Browning*, (Folcroft Library Editions, 1973), pp. 3-5.
 - (8) *A Browning Handbook*, p. 291.
 - (9) *Ibid.*, pp. 290-1.
 - (10) *The Seen & Unseen in Browning*, p. 12.
 - (11) C. M. Bowra, *The Romantic Imagination*, (1950), *The Romantic Imagination*, Edited by J. S. Hill, (The Macmillan Press. Ltd., 1977) 中に所載。
 - (12) *The Seen & Unseen in Browning*, pp. 8-9.
 - (13) J. Milton, *Paradise Lost*, Book I ll. 61-7.
 - (14) *The Seen & Unseen in Browning*, p. 16.
 - (15) P. B. Shelley, *To a Skylark*, ll. 6-10.
 - (16) S. T. Coleridge, *Kubla Khan*, l. 36.
 - (17) W. Wordsworth, *Lines Composed A Few Miles Above Tintern Abbey*, ll. 43-9.
 - (18) W. H. Griffin & H. C. Minchin, *The Life of Robert Browning* (Archon Books, 1966), p. 185.
 - (19) 高橋 巨著「西洋神秘主義思想の源流」, 創文社, 昭和51年, 58-80頁。
 - (20) 「北星論集」(18号)(1980年), 拙文「R. Browningの *Pauline*: Identityの確立をめざして」参照。
 - (21) 「西洋神秘主義思想の源流」 p. 80.
 - (22) W. H. Griffin & H. C. Minchin, *The Life of Robert Browning*, p. 184.
 - (23) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, (North-Holland Publishing Company, 1974). と J. E. Cirlot, *A Dictionary of Symbols*, (Routledge & Kegan Paul, 1962) “light”の項参照。
 - (24) W. Wordsworth, *Ode Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood* ll. 58-65.
 - (25) *The Seen & Unseen in Browning*, pp. 22-3.

- (26) *Browning's Star-Imagery*, p. 186.
- (27) *Ibid.*, p. 187.
- (28) *Dictionary of Symbols and Imagery* と *A Dictionary of Symbols* の
“star”の項参照。
- (29) *The Seen & Unseen in Browning*, p. 25.
- (30) R. Browning, *Bishop Blougram's Apology*, ll. 693—7.

On "Abt Vogler" by R. Browning

Tadao NOGUCHI

It is generally recognized that "Abt Vogler", published in *Dramatis Personae* in 1864, is the greatest poem about music. It is not too much to say that the poem contains all of the poet's characteristic conceptions of music, mysticism and philosophy. When we wish to think of Vogler's creative experience with musical instrument called an orchestrion, we cannot help facing one problem. As C. W. Smith suggests, when Vogler reaches the world of ecstasy, so that the earth becomes in harmony with heaven, he nonetheless retains his individual identity. We try to find the answer of Browning's attitudes toward his recognition of the unity of Neo-Platonism and Christianity.

Moreover we are going to discuss some other problems of art and life derived from Vogler's pure intuition of the absolute reality of God.